



No. 71

2011年3月発行

新潟県会報

マイスコープ

佐潟に 10,000 羽のコハクチョウが飛来！

新潟市 佐藤 安男（佐潟・水鳥湿地センター）

越後平野にどのくらいのハクチョウ類やガン類が飛来・越冬しているのか把握するために、呼びかけに応じた有志によって2000年10月に瓢湖、福島潟、鳥屋野潟、佐潟で同時に調査が始まりました（10月から3月までの毎週金曜日早朝に実施、新潟県水鳥湖沼ネットワーク）。これまでの10年の調査の結果からハクチョウは12月のピーク時に4湖合計で最大約15,000羽が飛来・越冬すること、佐潟では1月のピーク時に約4000羽が飛来することなどがわかってきました。ところが大雪であった2010年2月には約7000羽が佐潟に飛来し、これまでの記録を上回りました。そして迎えた11年目の今シーズン。11月に入り佐潟に飛来するハクチョウが早くも

5,000羽以上を数え、1月の大雪後にはさらに数を増し、2011年2月4日には過去最高羽数となる10,199羽のハクチョウ（内10,018羽がコハクチョウ）を記録しました。例年日本に渡来するコハクチョウは35,000～40,000羽ほどと言われており、約25%が佐潟に集結したことになります。同じ日には3,000羽を超えるヒシクイとマガン、43羽のシジュウカラガンが確認され、周辺水田では37羽のハクガンの群れも観察されました。大雪のため水田で餌を採ることができなくなり、積雪量の少ない佐潟に大型水鳥が集中したものと考えられ、水鳥たちにとって佐潟が重要な越冬場所であることを改めて知ることができた興味深いシーズンとなりました。



10,000羽のコハクチョウの群れ



手前の群れがシジュウカラガン 43羽の群れ

カワガラスの繁殖を垣間見て

新潟市 千葉 晃

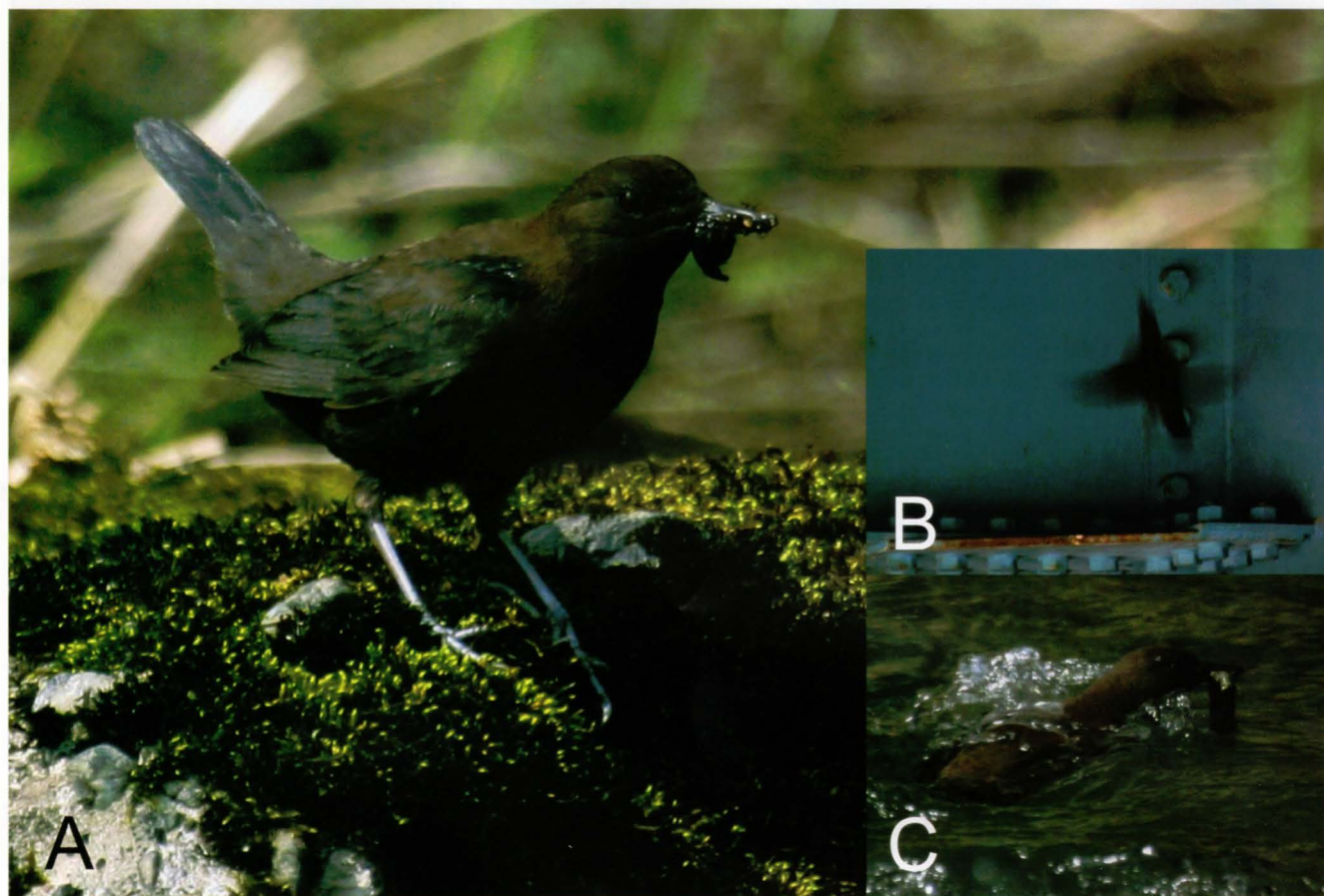


図1.A, 餌をくわえたカワガラスの親鳥 ;B, 巣へ飛び上がる親鳥 ;C, 泳いで餌を運ぶ親鳥

はじめに

時々山地へ探鳥に出かけるが、そこには必ずと言って良いほど沢や川があり、時には「ビッ・ビッ」と鳴いて水辺を素早く飛ぶ全身暗褐色の小鳥に出会う。カワガラスだ。よく見かけるが、私はその繁殖の様子を観察したことがなかった。県内でも報告例はごく少ないように思われる(山崎 1974、上越鳥の会 2008)。2009年3月、偶然観察し易い場所で巣を見つけ、育雛や巣立ち雛の様子を観察・記録することができた。その結果を写真で紹介する。但し、観察時間はごく少なく、2009年は3月5、9、18日の3日間、翌年は3月31日4月9、20の3日間、合計6日間(総観察時間約15時間)に留まった。観察は、晴天の日中(9時-14時の範囲)で、車中やブラインドから行った。

巣を発見

営巣地は中越地方の山麓を流れる信濃川の1支流にあり、巣は川と交差する国道290号線上の橋梁の片隅(地上約2.7m)で発見された。環境は低山・山村・水田を伴う川の上流域で、付近の川幅は低水敷を含め約5-10m、水は清冽であった。3月5日、警戒しながら餌を運ぶ成鳥に気付き、その後静かに観察を続けた。親鳥は橋下の川岸で腰を上下しながら警戒し、安全を確かめて直接橋の下面に飛び上がるか、水中を泳いで橋の直下に近づき、一旦橋梁の一部に飛び移るなど警戒してから巣に入るようであった(図1)。警戒心はかなり強かった。巣は鉄骨支柱とコンクリート製橋梁の間にあり、大略5-6角形のドーム状構造(幅約30cm、高さ約12cm、奥行き約17cm)で、外装全体はコケ類から成り、巣の出入り口は南東に面し、横下向きに開いていた。3月18日の画像を見ると、巣内に5羽の雛が確認できた(図2)。

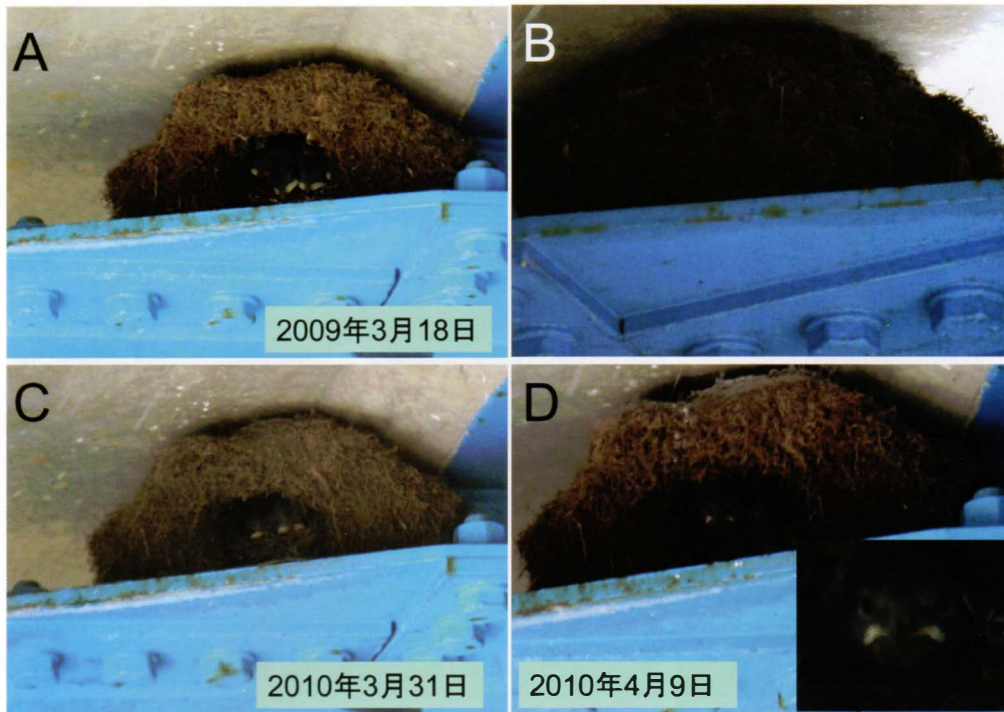


図 2.A, カワガタスの巣と雛 (2009年3月18日撮影);B, 同巣の背面;C, 同巣と雛 (2010年3月31日撮影);D, 2010年4月9日の様子 (右下隅は巣立ち前の雛の強拡大図)

育雛の様子

親鳥の警戒心がかなり強いため、巣口で餌を授受する様子は観察しないことにした。そして、もっぱら巣に接近する親鳥の口元に注意し、餌生物が何であるかに注目した。巣に出入りする親鳥は2羽であったが、外観から雌雄を区別することはできなかった。したがって、育雛活動の雌雄分配(貢献度)は不明である。観察期間中の餌の運搬

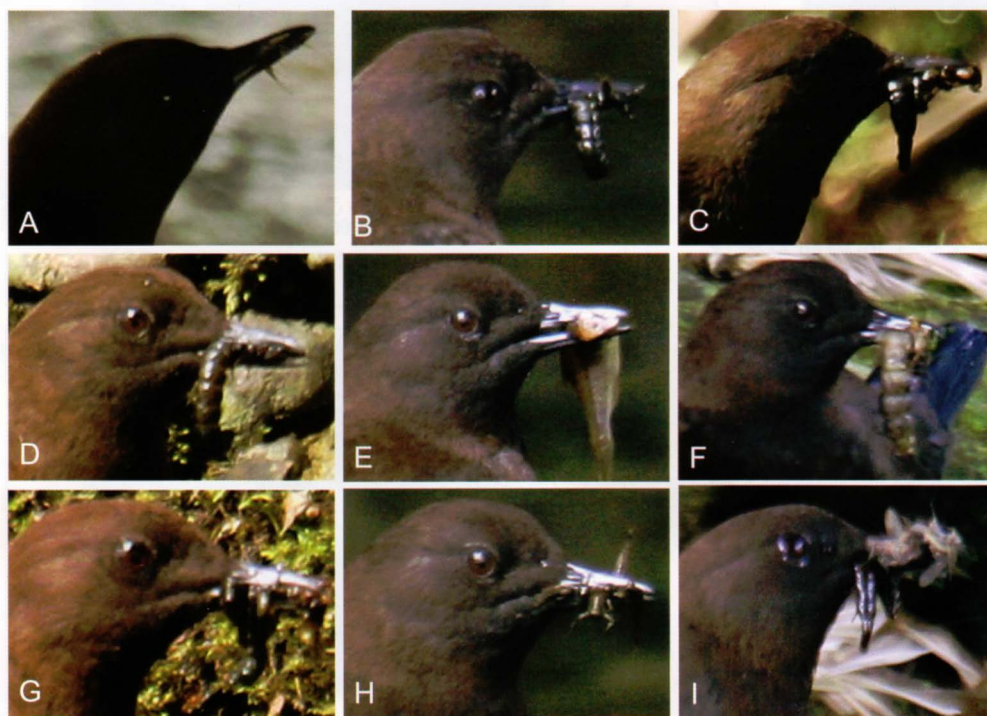


図 3. カワガタスの給餌生物 (E だけが小魚で他はすべて水生昆虫)

間隔は4~17分とかなりばらつきが大きかった。これは、その時点での餌の得易さにも関係あるのだろうが、むしろ雛の発育段階や数を反映したものと考えられる(図3)。すなわち、雛がまだ小さかった2009年3月5日には餌も小さくかつ少量であったが(図3A)、巣立ち直前の2010年4月9日には、大小多数の餌を運んでいることがわかった(図3I)。画像を見る限り、餌の大半は水生昆虫(トビ

ケラ類、カワゲラ類、カゲロウ類)の幼虫で、時折小魚(種不明のコイ科魚類稚魚)を運んでくることもわかった(図3E)。

巣立ち雛

巣立ちの瞬間を見る機会はなかったが、前後の様子から2009年の場合は3月下旬に巣立ったものと判断された。翌年の春は、巣立ちの様子と巣

の経年使用の可能性に注目して観察を行った。2010年3月31日の観察により、同じ場所で同じ巣を使って繁殖が行われたことを確認した。親の個体識別はしていないため確証はないが、2羽またはどちらか一方は昨年と同一個体の可能性が考えられる(図2)。この年の繁殖段階はほぼ昨年予想したものに近似し、4月9日に観察した巣内雛(少なくとも3羽)は巣立ち近いことがわかった(図2D)。4月20日に現地を訪ねたと

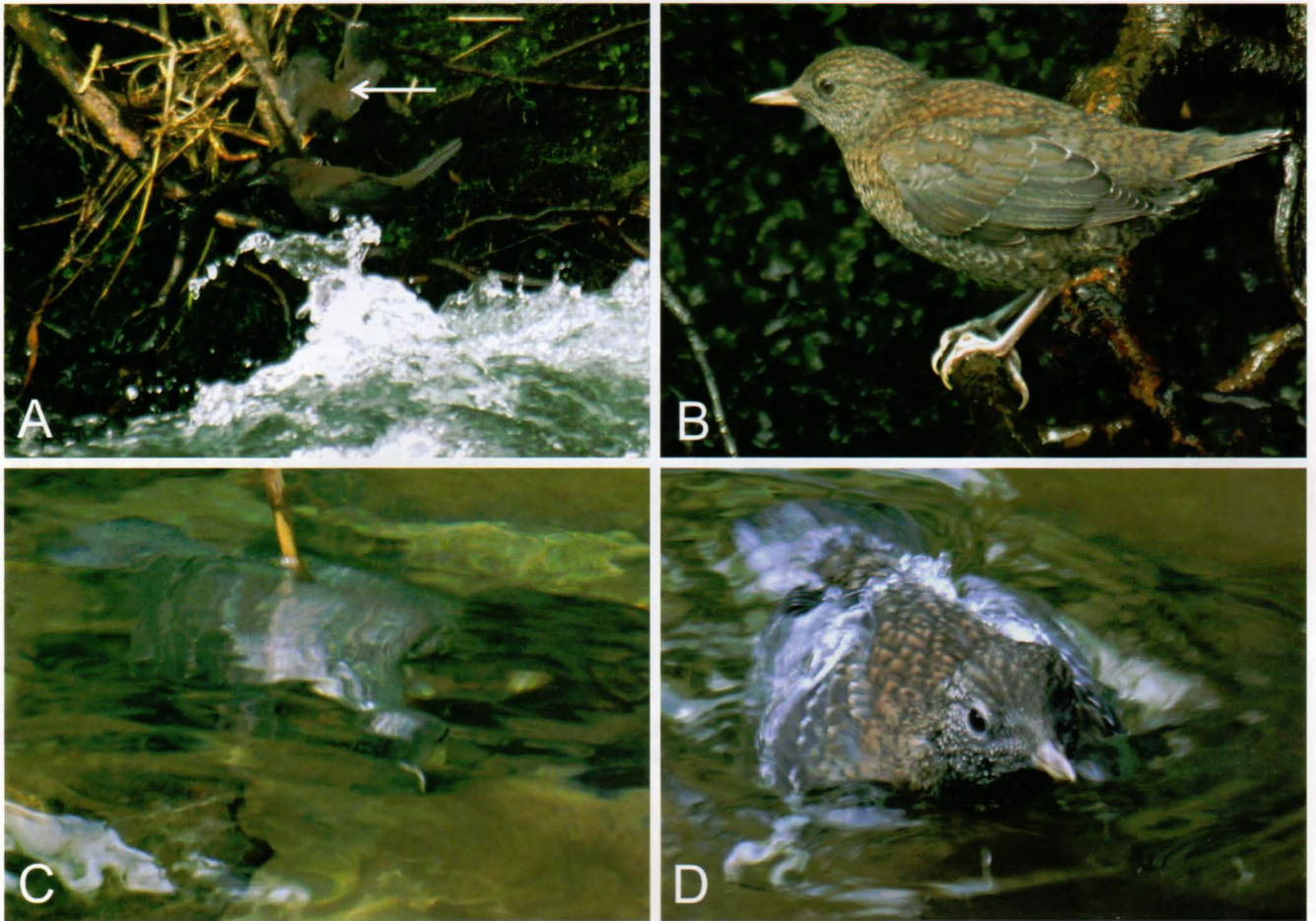


図 4.A, 餌をねだる巣立ち雛 (矢印) と親鳥 (手前); B, 巣立ち後約 1 週間とみられる雛の外観; C, 潜水中の雛; D, 水面へ顔を出した雛

ころ、巣に雛は見え、そこから約 50m 上流の瀬の岸で 1 羽の親鳥が 1 羽の巣立ち雛に給餌している様子を観察できた (図 4A)。雛は親鳥よりわずかに小さく、岩を跳び移り倒木の上を歩行することはあったが、飛翔することはなかった。よく見ると全身に淡褐色のマダラ模様があり、親との識別は容易だった (図 4B)。一方、全体の体形と尾を振る様子は親によく似ていた。この雛は、当日の朝川岸で 9 時過ぎに 1 回給餌を受けただけで、その後約 1.5 時間はそこに留まり、時折欠伸や整羽などをして給餌を待っているようみえた。しかし、その後意を決したかのように岩を跳びながらゆっくり移動を始め、やがて筆者の傍約 6m まで接近してきた。見ていると、水際で餌を探している様子である。そして、流れの緩やかな浅瀬で潜り、水底を歩いて私の前に顔を出した (図 4C、D)。雛が遠ざかるのを待つ静かにこの場を離れた。

巣の多回使用

前述したように、この営巣場所では同じ巣が経

年 (少なくとも連続 2 年) 使用されたことになる。2009 年 3 月 18 日と 2010 年 3 月 31 日にほぼ同じ場所からほぼ同じ角度で撮影した画像を比較すると、巣の外観は殆ど変化していないことがわかった (図 2A,C)。産座など内部に変化があったか否かは不明であるが、多回 (経年) 使用される巣は次第に大型化するものと思っていた。しかし、この予想は正しくないことがわかった。

文献

- 上越鳥の会編・著 (2008) 雪国上越の鳥を見つめて。新潟日報事業社・中村雅彦監修
 山崎拓雄 (1974) 新潟県産鳥類の紹介 (No.11) カワガラス。野鳥新潟第 26 号:1.

コトアツバ

冬の海岸に出掛けてきました。

新潟市 高 辻 洋



ハギマシコ 1月31日 間瀬漁港 鳥はやや珍しいですが、地べた、それもゴミの脇ですから、あまり冴えない画像です。



ビロードキンクロ 1月21日 寺泊港 幼鳥と思います。



クロガモ 2月6日 寺泊探鳥会の寺泊港にて。



コクガン 1月31日 出雲崎漁港 船揚げ場の海藻を食べていました。10メートル以内まで近寄れました。

新潟県立大潟水と森公園の野鳥

柏崎市 池田 裕一（大潟水と森公園）

公園の概要

大潟水と森公園は、日本海沿岸の砂丘後背地に発達した“潟”を舞台にしています。“潟”の貴重な自然を残し伝えつつ、自然や歴史、文化を学ぶ場として整備が進められ、平成22年に全面開園となりました。

「エントランスゾーン」、「お休み広場ゾーン」、「自然体験楽校ゾーン」、「野鳥観察ゾーン」、「自然観察園ゾーン」、「歴史ゾーン」、「潟の里ゾーン」の7つのゾーンがあり、自然観察や森林浴、散策などを楽しむことができます。

野鳥の概要

園内には、鶺鴒池とそれを取り囲む林があるため、年間を通して、水鳥と小鳥類の両方を楽しむことができます。また、隣接して朝日池があるため、冬場は豊富なガン・カモ類も楽しむことができます。

四季折々の野鳥たち

～春～

春が近付くと、園内は野鳥のさえずりで賑やかとなり始めます。鶺鴒池では、カイツブリが、「キリリリ・・・」と鳴き、その上空では、ミサゴが魚を狙って旋回しています。林では、ホオジロ、カワラヒワ、シジュウカラ、ヤマガラ、エナガなどが盛んにさえずっています。中でも目も耳も引くのは、キビタキです。「ピッコロリ」ときれいな声でさえずり、その姿は、輝かしいオレンジがかかった黄色。キビタキは園内で繁殖しているようです。公園は、渡り鳥の中継地として、オオルリやコルリ、サンショウクイやアオバトなども観察することができます。

～初夏～

鶺鴒池ではヨシが背を伸ばし、見応えのあるヨシ原が作られ始めます。林は葉が茂り、やがて深々とした緑色で覆われます。

この時期は、姿よりも鳴き声の方が良く分か



鶺鴒池

ります。鵜ノ池のヨシ原からは、「ギョギョシギョギョシギョギョシ」。林の樹冠からは、「チョチョリチョリチョリチョリ」や「ヒーティーキー」。そうです。ヨシ原からはオオヨシキリが(コヨシキリの鳴き声を聞くこともあります。)、林からはメボソムシクイやエゾムシクイが夏を感じさせてくれる声を響かせているのです。

～秋～

農業用水としての役割を持つ鵜ノ池の水は、この時期に排水されるため、鵜ノ池は干潟のようになります。そうするとやってくるのはシギ・チドリ類。トウネン、アオアシシギ、タカブシギ、コチドリなどが採食に勤しんでいる姿を観察することができます。林には、コサメビタキやエゾビタキが多数やって来て、その愛くるしい顔をじっくり観察することができます。



刈りをするミサゴ

～冬～

この時期になると、観察場所は朝日池まで広がります。水鳥は朝日池、小鳥は公園という具合です。朝日池には最大で3000羽以上のマガンの群れが飛来し、集団で降り下りる光景は圧巻です。また、近年ではハクガンが毎年飛来しており、平成22年度は、過去最高の38羽が確認されました。その他にも、シジュウカラガン、サカツラガン、カリガネなど珍しいガン類も観察されることがあります。公園の林は葉を落とし、小鳥を観察するには絶好の条件となります。サクラにはウソ、マツヤスギにはヒガラやキクイタダキ、ハンノキにはマヒワがやってきます。その他にも、アオゲラ、アカゲラ、コゲラ、ミソサザイ、シロハラ、ツグミ、時にはルリビタキが観察されることもあります。



コサメビタキ



キビタキ



ハクガンの群れ (38羽)



背を伸ばしたヨシ原

おわりに

大潟水と森公園は、年間を通して野鳥観察ができるスポットです。その他にも、季節の花やトンボなどの昆虫も楽しむことができます。一度訪れてみてはいかがでしょうか？

新潟県立大潟水と森公園

現在地：上越市大潟区潟町 1381

TEL：025-534-6190

H P：http://www.oogata-mizutomori.jp/

山本山で観察されたワシタカ類 (2009年9月~12月)

小千谷市 中山 正 則

2009年9月6日~2009年12月30日の間、小千谷市山本山でワシタカ類の渡りを把握するための調査を行いました。調査実施日数は、9月が21日、10月が30日、11月が19日、12月が17日計87日となりました。ワシタカ類の出現可能性が高い天候・気象条件の日は、ほぼ実施しました。調査の結果、ワシタカ類は13種類、3,658個体が記録されました。種類別の概要等は次のとおりです。

ミサゴ *Pandion haliaetus* 9月14日~10月15日の間に計7個体が確認されました。10月13日には、同時に2個体が観察されました。

ハチクマ *Pernis apivorus* 9月6日から観察され、終認は10月15日でした。最も多く観察されたのは、9月18日で213個体でした。渡りのピークは、9月中・下旬でした。調査期間での確認総数は、663個体でした。

トビ *Milvus migrans* 調査期間を通し、コンスタントに観察されました。10月中旬に最も多く確認されました。渡りの個体は少なく、多くは、逍遙・採餌・休息中の個体・個体群でした。

オジロワシ *Haliaeetus albicilla* 11月26日(成鳥1個体)、12月5日(亜成鳥1個体)の2回観察されました。

オオタカ *Accipiter gentilis* 9月6日~12月5日の間に49個体が確認されました。この期間中、コンスタントに出現しました。最も多く観察されたのは、11月4日の5個体です。

ツミ *Accipiter gularis* 9月6日~12月12日の間に425個体が観察されました。ピークは、9月中旬~10月上旬ですが、観察された期間中コンスタントに出現しました。最も多く見られたのは、10月1日

の66個体でした。

ハイタカ *Accipiter nisus* 9月9日~12月12日の間、80個体が観察されました。この結果から知られるように、渡りは長期間に及びました。最も多く見られたのは、10月4日の7個体でした。

ノスリ *Buteo buteo* 9月6日~12月14日の長期間にわたり観察され、確認総数は1,354個体で、今回観察されたワシタカ類の13種の内では最も多い確認数となりました。渡りのピークは、10月中・下旬で、最も多く確認されたのは、10月29日の168個体でした。

サシバ *Butastur indicus* 9月6日から観察され、終認は10月6日でした。最も多く観察されたのは9月18日の269個体でした。渡りのピークは9月中・下旬でしたが、ハチクマの渡り期より少し早い傾向が見られました。調査期間における確認総数は、834個体でした。

イヌワシ *Aquila chrysaetos* 9月19日(幼鳥1個体)、9月24日(幼鳥1個体)、9月27日(幼鳥1個体)、10月12日(幼鳥1個体)、11月25日(成鳥1個体)に確認されました。例年、繁殖生息地から漂行してきた個体が稀なく観察されますが、山本山を通過して行く個体も見られます。

ハヤブサ *Falco peregrinus* 9月9日~11月26日の間に23個体が観察されました。最も多く観察されたのは、9月14日の10個体でした。全体の個体数は多くありませんが、渡りの期間は長期間に及びました。

チゴハヤブサ *Falco subbuteo* 9月20日(1個体)、9月21日(2個体)、10月1日(1個体)、10月5日(1個体)の計5個体が観察されました。

チョウゲンボウ *Falco tinnunculus* 9月6日~12月5日の間に26個体が観察されました。最も多く観察されたのは、11月13日の12個体でした。調査の結果に見られるように渡りの期間は、長期間に渡りました。

以下、2009年・2010年秋のワシタカ類渡り時、山本山で撮影したワシタカ類の写真及び図(2009年)をご紹介します。

表 山本山におけるワシタカ類の確認記録(2009年9月~12月)

種 名	9月			10月			11月			12月			計
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	
ミサゴ <i>Pandion haliaetus</i>		3	1		3								7
ハチクマ <i>Pernis apivorus</i>	9	441	164	47	2								663
トビ <i>Milvus migrans</i>	16	18	20	20	43	13	11	6	21	15	2		185
オジロワシ <i>Haliaeetus albicilla</i>										1	1		2
オオタカ <i>Accipiter gentilis</i>	2	10	3	1	7	8	10	2	5	1			49
ツミ <i>Accipiter gularis</i>	8	87	94	127	42	52	5	3	5	2			425
ハイタカ <i>Accipiter nisus</i>	2	2	3	17	15	27	5	3	3	3			80
ノスリ <i>Buteo buteo</i>	4	11	19	210	403	477	106	23	78	19	4		1,354
サシバ <i>Butastur indicus</i>	39	628	141	26									834
イヌワシ <i>Aquila chrysaetos</i>		1	2		1					1			5
ハヤブサ <i>Falco peregrinus</i>	2	12	1	1	2	3				2			23
チゴハヤブサ <i>Falco subbuteo</i>		1	2	2									5
チョウゲンボウ <i>Falco tinnunculus</i>	1	1	1	2		4	1	12	3	1			26
計	83	1,215	451	453	518	584	138	49	119	42	6		3,658

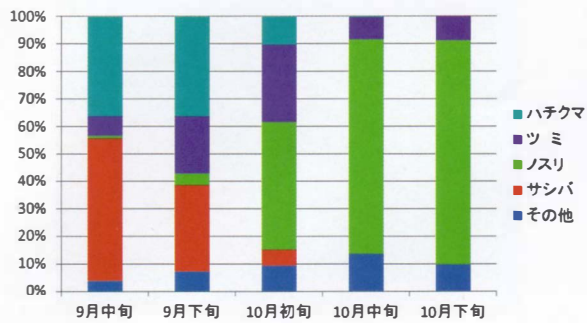


図1 確認個体数の多いワシタカ4種の比較



ハチクマ雌成鳥褐色型 2009.9.21 9:27
初列風切羽の右羽、左羽のそれぞれ1枚が換羽中である。成鳥は、換羽中・事故等で羽が抜けている個体が多くみられる。



ハチクマ幼鳥淡色型 2009.10.13 10:23
初列風切羽のフィンガー部分が黒い。抜け羽がないので、羽全体が美しい。



ハチクマ雌成鳥淡色型 2009.9.21 11:27
淡色型に近い個体である。ハチクマは、個体々の羽影が微妙に異なる。



ハチクマ幼鳥暗色型 2009.10.1 10:25
幼鳥個体の羽は、抜け羽がなく、美しく見える。



ハチクマ幼鳥淡色型 2010.10.3 10:15
幼鳥の初列風切羽のフィンガーは、黒褐色味が強い。本種の頸部は細長い。



オオタカ成鳥 2009.10.31 11:45
初列風切羽のフィンガーは6枚。



オオタカ幼鳥 2010.10.3 9:45
胸部・腹部に茶褐色の縦斑がある。羽全体が、茶色っぽい。



オオタカ成鳥 2010.11.25 12:48

成鳥の胸部・腹部には、横斑がある。



ツミ雄成鳥 2009.9.14 9:04

腹部は白く、胸部・脇は黄褐色。日本国内で観察されるワシタカ類で、ツミの雄は最も小型である。



ツミ雌幼鳥 2010.10.22 10:42

腹部に茶褐色の横斑がある。喉部・胸部は縦斑。初列風切羽のフィンガーは5枚。



ハイタカ雄成鳥 2009.10.22 9:54

胸部・腹部に薄褐色の横斑がある。脇の部分は、黄褐色を帯びている。雌より小さめである。



ハイタカ雌成鳥 2010.11.7 11:43

雌の脇は、黄褐色がない。全長も翼長もやや長めである。初列風切羽のフィンガーは6枚。



ハイタカ雌成鳥 2010.11.7 11:45

ハイタカ雌成鳥の脇は、黄褐色味を帯びない。



ノスリ成鳥 2009.10.15 10:21

全体に黒っぽい個体。虹彩が暗紅褐色の成鳥。幼鳥の虹彩は、黄色である。



ノスリ成鳥淡色型 2009.10.25 10:50

全体の羽が白色味の強い個体。ケアシノスリは、尾羽の先端に黒帯があることにより本種と識別される。



ノスリ成鳥 2010.11.25 11:34
褐色味の強い個体。成鳥の虹彩は、暗紅褐色である。



サシバ成鳥雄 2010.9.18 9:24
成鳥雄の上面・胸部は茶褐色。脇・腹部は横斑がある。



サシバ成鳥雌 2010.9.18 10:33
下面の胸部・脇・腹部に横斑がある。



サシバ幼鳥 2010.9.6 10:31
アカメイタヤの樹上で休息するサシバの幼鳥。胸部・腹部は縦斑。虹彩は暗褐色。



ハヤブサ成鳥 2009.11.26 11:51
幼鳥は、胸部・腹部は茶褐色の縦斑となる。



チゴハヤブサ幼鳥 2010.10.5 13:07
幼鳥の下面の縦斑は密である。脛部・下尾筒は淡黄褐色。



チョウゲンシ雄垂成鳥 2009.10.30 11:11
頭部が、青灰色であり、尾羽の下面に細い横帯が7本あることから、雄の若鳥と思われる。



チョウゲンシ雌成鳥 2010.9.2 9:28
腹部の縦斑が薄いことから雌成鳥と思われる。本個体の蠟膜は黄色である。

出 会 い

柏崎市 会田 玲子

人は何かを切っ掛けにガラリと変わる事があります。考え方や物の見方、感じ方など、その切っ掛けのひとつに出会いがあるのではないのでしょうか。

私は子供の頃から犬や猫が好きで、今も犬を飼っています。けれど鳥にはあまり興味がなく、目が恐いとか足が爬虫類ぽいと思い、かわいいとは思えませんでした。

そんな私がなぜ野鳥の会にまで入るようになったのかは、ある出会いがあったからです。鳥に興味のない私は当然名前も知りません。スズメ、カラス、ハト、ツバメ、この位はわかりますが、小学校レベルです。

3年くらい前だったと思います。冬の日の曇り空を、黄色い鳥がヒラリと柿の木にとまりました。私には、インコかカナリア位黄色に見えたのです。はっきりいって衝撃的でした。何だろうとゆっくり近づき、とまっている木の枝の下まで行きました。初めて見るその鳥に胸がワクワクドキドキです。たまたま持っていたカメラで写真を撮りたくさん撮りました。よく見ると最初に感じたほど黄色ではなかったのですが、それでも、こんな鳥がいるなんて、とても不思議でした。家に帰って写真を確認し、名前を調べてみると「アオジ」という鳥でした。黄色なのにアオジ？とか言いながら詳しい説明をみると「一年中いて、あちこち普通に見られる。」と書いてあります。私は〇十年も生きてきて、絶滅危惧種でもないこの鳥をはじめて見たという自分にも驚きました。本当に興味がなかったんですね。それからは双眼鏡を持って公園などに行くようになりました。すると鳥の種類のに驚きます。探鳥会にも参加させてもらい色々教えて頂いています。鳥を見ていると地球の環境の変化にも気づくという、私には驚く事

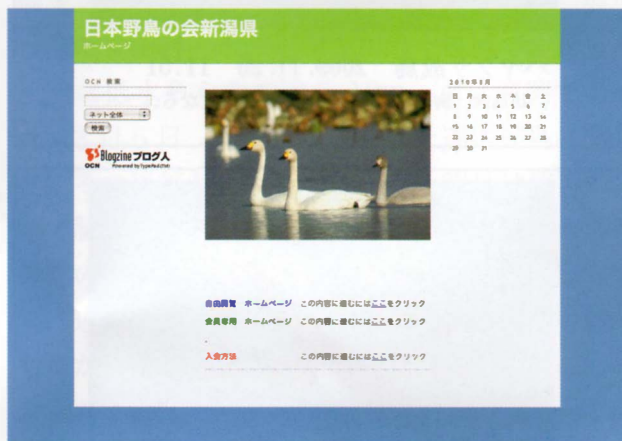
ばかりです。バードウォッチング超初心者の私にはすべてが新鮮で楽しいし鳥達のことも、しぐさや、色や形がかわいいと思うようになりました。これからも、鳥や人との出会いを楽しみに、探鳥会に参加したいと思っています。



2月6日寺泊探鳥会での出雲崎港探鳥風景

日本野鳥の会新潟県ホームページ

ブログ形式のホームページです。
最初の Top ページのサイトに入るには、Yahoo のファイル-開く-から、
<http://wbsj-niigata.blog.ocn.ne.jp/main/>
と入力して OK をおしてください。
詳しくは、No.70 号の会報をお読み下さい。



発行 2011年3月31日 No.71
発行人 石部 久 編集者 小林成光、浦部良雄、千葉 晃
事務局 〒950-0941 新潟市中央区女池3丁目13番25号
TEL 025-285-2405 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002